

# よく分からなかった、だからやろうと思った ——ヴァレリー、読むこと、そして書くこと

## 最も大切なのは内的作業で、 後はその知的応用に過ぎない

朝早く起きて、コーヒーを飲み、タバコをくゆらしながら思索に耽る。この『カイエ』を紡ぐ早朝のひとつこそポール・ヴァレリー（1871～1945年）にとって最も重要な時間でした。『カイエ』とは、自分のためのノートのこと。「一番大切なのは『カイエ』を書くという内的な作業で、後のものはその知的応用に過ぎない」とは彼自身の言葉です。公表された作品やエッセーは、『カイエ』の応用問題だったわけです。ですから、この重要な『カイエ』——電話帳のような本にまとめられ29冊あります——をヴァレリーは、戦争中もリュックサックに入れて疎開させています。

もっとも、発表するものは「内的作業の知的応用」に過ぎないという形で、自分を売り出したともいえます。当時は、ルソーが『告白』で赤裸々に自らを描き出してからすでに100年以上経ったころ。文学的意識の高い作家は普通の「私語り」で書くことはもう不可能でした。友人のジッド\*も自己暴露的なテキストを発表していましたが、露出過多でかえって彼の

本当の姿が見えなくなる、というカラクリが仕込まれています。これに対してヴァレリーは、露出が少なすぎて姿が見えない。ジッドとは正反対のやり方で社会との関係を持つとしたのでしょう。

ポール・ヴァレリーは詩人として出発して、批評家としても活躍した人です。日本への影響では、小林秀雄が批評家として影響を受けています。小林秀雄は若いころ、自分の批評の言葉を作るときにヴァレリーをととも参考にしました。

\*アンドレ・ジッド（1869～1951年）：フランスの小説家。  
『新フランス評論（NRF）』創刊者の一人。

## 〈第三共和制の知性〉として ヨーロッパの危機を生きる

ヴァレリーはセット生まれで、モンペリエという地中海に面した街で育ちました。モンペリエ大学の法学部で学んだ後、20代前半にパ

リにて、文学的放浪者のような生活をします。文学者の仲間に入っていたのですが、生活のために1897年に陸軍省に就職しました。文学者には、そうした慣例のようなものがあつたのです。しかし、それも気に入らず、1901年には辞めてしまいます。そして、その後は長くアヴァンス通信社重役の個人秘書として務めていました。〈若いときには気の利いた詩を書いていたが、近ごろは消えてしまった〉といった存在だったのです。

それが、1917年に長篇詩『若きバルク』を発表したところから有名になり、〈第三共和制の知性〉とか〈ヨーロッパ知性〉の代表のようにいわれるようになりました。二つの世界大戦の間、1920～30年代が、彼の華々しく活躍した時代です。

当時は「西洋の没落」や「精神の危機」が語られていたことから

も分かるとおり、第一次世界大戦の荒廃でヨーロッパが自信を失っていました。そんなときに、ヴァレリーが非常に複雑で華麗な文体で書かれた作品とともに登場し、フランスの上流階級や知識人の心を捉えたのです。

その理由の一つに、ヴァレリーが古典的な詩を書いたことが挙げられます。『若きバルク』は、「アレクサンドラン」（12音綴詩句）という最も伝統的な韻律で書かれています。戦争で負



『カイエ』より。ヴァレリーは個人的なことを公にすることを嫌っていました。自己韜晦（とうかい）があつたのです。そこで、自画像を描いても半分消してみたりしたのでしょう。消したところから顔が少し透けて見えているのがミソでしょう。

けてフランス語が危機に瀕するのではないかという意識がヴァレリーにはあり、フランス語の「墓標」として彼は『バルク』を書いたのです。もっとも、そこに盛り込まれているものは、現代人の複雑な内面世界で、近代以降の人間が生きることを強いられた分裂した意識のありよう——とりわけ、情念と知性が交錯する中で現れる錯綜した時間意識——が、力業で古典的形式にまとめ上げられているのです。また他方で、文学や絵画、政治など多様なテーマについて書かれたエッセーは、レトリックの技法を駆使してアクロバチックに構築されており、フランス語の表現の可能性を徹底的に突き詰めたものでした。

第一次世界大戦が終わるころからヨーロッパ自体が疑問に付され、ダダイズムが伝統的価値観を否定し従来の表現形式や言語形態を破壊したところで、1920年代以降のシュールレアリスムの時代を迎えます。彼らは既成の権力や制度に対して挑発的でした。そうした伝統批判の前衛芸術運動を一方に置いてヴァレリーを位置づけると、彼の営みの複雑さが立体的に見えてきます。つまり、その内容はきわめて現

代的でありながら、フランス語の伝統をも引き受け、両者を作品の中に統合しようとした姿が見えてくるわけです。

## 一流の詩人が思索を深めて批評する凄み

ヴァレリーの凄さは、実作者として自分で詩を作るところから出発して考えたところにあります。一般的に批評家は自分では作品を作りません。ヴァレリーは一流の詩人であり、詩を書くときの種々の困難をリアルな経験として自分の中にもっていたわけです。この体験こそ、彼の批評の原理となり、彼はそれと引き比べて対象を判断していたといえると思います。よくある批評は、自分が一番偉い、モノが見えているのは自分だけだ、というスタンスで対象を上から評価するようになってしまいがちですが、ヴァレリーは理論的、抽象的に語るときでも、その言葉は内的な経験にきちんと裏打ちされています。

彼の師匠はステファヌ・マラルメ (1842～1898年) という象徴派の詩人です。このマラルメとアルチュール・ランボー (1854～1891年) とが先行世代としてははずば抜けた存在でした。ヴァレリー自身も一流の詩人ですが、自分は彼らのレベルまで至らないのではないかと思ひ悩みます。そこで彼は実作を離れ、文学そのものについて理論的に考え始めたわけです。文学は言葉で作られる、では言語とはなにか、言語は精神の現象の一つである、では精神とはなにか。こんな風に彼の思索は深まっていき、やがて心理学や社会批判などにも至ります。こうした思索を書き留めたのが『カイエ』で、1894年から1945年に亡くなるまで50年間書き続けられました。

## 歴史的文脈を再構築してヴァレリーに迫る

『カイエ』は断章であって、そこだけ読んでもよく意味は分かりません。これまでの研究では、いろいろな引用を集めてきてテーマ別に分類して考えていました。しかし、それでもよくは分からないのです。そこで、学位論文にまとめた研究では、思想史的な文脈を再構成して、その中にヴァレリーの書いた断片を置いていくという方法を取りました。ジークムント・フロイト (1856～1939年) やベルクソン\*\*など他の思想家たちと共有していた思想の空間、言説空間を再構成してその中にヴァレリーを置くと、他の思想家たちとの関係も分かりやすくなります。

例えば、フロイトは「無意識」を強く打ち出して精神分析を創始しましたが、従来、ヴァレリーとフロイトの関係を論じるときには、精神分析の手法でヴァレリーを読むというのがほとんどでした。そうではなく、ヴァレリーもフロイトも同じ知的雰囲気の中で、それぞれ同じ枠組みから出発して、フロイトは精神分析に、ヴァレリーは自分の詩学に至ったという風に考える方が歴史的にも正確だし、いろいろと見えてくるものもあります。フロイトでヴァレリーを読むというのは、あまり生産的ではありません。精神分析で読めば、

精神分析の結論しか出てきませんから……。

フロイトは1885年にウィーンからフランスに留学したとき、高名なジャン＝マルタン・シャルコー (1825～1893年) のもとで学びました。シャルコーは神経学を専門とする医師で、ヒステリーの研究もしていました。フランスではその後、1920年代に精神分析が受容され流行するまでは、シャルコーの流れをくむピエール・ジャネ (1859～1947年) の理論が主流でした。ジャネ流の無意識は「下意識」と呼ばれますが、フロイトとは違う形で考えられています。歴史的に研究すると、ヴァレリーの思想はフロイトよりもジャネに近いことが分かり、問題をもっと正確に理解することができるようになりました。

\*\*アンリ・ベルクソン (1859～1941年)：フランスの哲学者。

## 書くことの意味

小林秀雄について本を書いたことがあります。そのとき、小林秀雄については「分かった」と思いました。ほぼ見えた、という実感があったのです。しかし、ヴァレリーはよく分かりませんでした。その「分からないところを分かりたい」というのが、ヴァレリー研究に本格的に取り組むキッカケになったといえるかもしれません。こういう〈謎〉を嗅ぎ分ける嗅覚は学生のみなさんにも磨いてほしい能力です。

ヴァレリーの詩人としての実感、詩の制作にまつわる困難な体験こそ、彼の文学批評の基礎だったわけですが、20代のときはそこがまったく見えていなかったのです。その点については、自分自身が本を一冊書いて初めて実感として納得できました。本を書くことは、ごちゃごちゃしたアイデアのカオスを、選別・整理してまとめていくという力業です。つまり、無秩序と秩序を媒介することです。書く主体は、このつなぎ合わせる作業の中で生まれ、成熟します。そのプロセスは言葉にはできません。言葉で表現できるということは、もうまとめあがっているということですから……。これは実際にやってみなければ分からない体験的知識ですね。文学研究は資料を読むことだけでやるように見えますが、試行錯誤して書く体験こそが決定的に重要でした。よく読めるようになるためにはよく書けなければならないようです。(談)



言語社会研究科准教授

森本淳生

Atsuo Morimoto

1970年東京生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。ブレス・バスカル＝クレルモン第二大学博士(フランス文学・文明)。1996年9月、京都大学人文科学研究科助手。2005年9月、一橋大学大学院言語社会研究科助教授(2007年4月より准教授)。この間、バリ第十二大学、エコール・ノルマル・シュベリウール、国立科学センター近現代テキスト草稿研究所ヴァレリー・チームで研修。著書に『小林秀雄の論理——美と戦争』(2002年、人文書院)、『未完のヴァレリー——草稿と解説』(田上竜也氏と共編訳著、2004年、平凡社)、*Paul Valéry. La genèse du sujet et l'imaginaire. De la psychologie à la poétique* (Minard - Lettres Modernes, 近刊) がある。